

稲むらの火整備地区

(和歌山県 広川町)

- 計画期間 平成18年～21年
- 面積 150ha
- 交付対象事業費 703百万円
- 町人口 8,071人 (地区内人口 3,559人)

ポイント

濱口梧陵を核とした
災害に強いまちづくりと地域振興

地区概要

海岸部の人口密集地において、津波に対する防災関連整備で安全なまちづくりを進める。濱口梧陵の稲むらの火を活用した観光拠点の形成で地域振興を図る。

目標

地域の歴史・文化を活かした生活基盤施設の整備による防災機能の強化、及び濱口梧陵を活用した観光拠点の形成

指標

津波から住民を守るための避難時間の短縮、地域防災を支える自主防災組織数、観光拠点形成による地域振興を推し量る指標として人口と観光客数を設定しました。

避難時間	36分 (H17)	→	34分 (H21)
自主防災組織数	36団体 (H17)	→	40団体 (H21)
人口	8,071人 (H17)	→	8,200人 (H21)
観光客数	133,000人 (H17)	→	153,000人 (H21)

事業内容

基幹事業(513百万円) → 道路(延長 200m)、公園(2箇所 2,162 m² 1,037 m²)、地域生活基盤施設(避難誘導灯 55箇所、案内サイン 21箇所)、高質空間形成施設(カラー舗装 2箇所)、既存建築物活用事業(濱口梧陵記念館 510 m²)

提案事業(190百万円) → 地域創造支援事業(濱口梧陵記念館、観光案内所、サイン)、まちづくり活動推進事業(稲むらの火の館PR)



地区の現況と課題

当該地区は、津波で逃げ惑う住民を安全な高台に避難させた濱口梧陵の「稲むらの火」の町として歩んできましたが、近年工場の撤退等により、人口が減少傾向にあり、地域に停滞感がある。

また、津波から住民を安全に避難させるための道路の整備や夜間の避難に備えるため基盤整備が遅れており、安心・安全、元気なまちづくりが喫緊の課題となっている。

提案事業の特徴

濱口梧陵が残してくれた稲むらの火を後世に伝えていくことを目的に、関連事業で建設した津波防災教育センターと濱口梧陵記念館からなる「稲むらの火の館」を継承施設として建設した。

また、濱口梧陵が築いた広村堤防の整備や濱口梧陵関連史跡等の観光資源を案内する観光案内所を設けることで、特徴的な観光拠点の形成を図りました。

計画策定プロセス

地域住民の中から、「濱口梧陵が私財を投じて築いた広村堤防の保存会をつくりたい」との声から堤防の草刈等を行い保存していく「広村堤防保存会」が結成されました。また中央公民館の高齢者講座である耐久大学の受講者が濱口梧陵記念館の建設を願って、1日1円募金を始めました。これらの地域住民の気運の盛り上がりが一つの契機となり実施につながったものです。

広川町長のコメント

当該地区は、昔から津波に見舞われてきた歴史があります。

平成17年に東南海・南海地震の津波による浸水予測や被害想定が和歌山県から発表されたことで、現在その対策に取り組んでいるところです。

まちづくり交付金事業の導入で、住民の避難行動を助ける防災関連整備や稲むらの火を活用した観光拠点の形成による地域の振興に、ある一定の道筋がついたと考えています。

今後は、自主防災組織を中心とする地域防災の充実を図るために住民と連携をとり安心、安全なまちづくりを進めていきたい。

地域住民のコメント

今、自分たちが関わったまちづくりの計画が一つ一つ形として見えてきています。この計画が自分たちのまちづくりに対する意識を変える契機になったと思います。「広川町へ行ったら、おもしろい所が一杯あるから、友達を連れてまた行きたいなあ」と言われるようなまちにしようと、希望が芽生えてきました。

稲むらの火の館



濱口梧陵記念館（展示室）



広村堤防保存会の草刈の様子



自主防災組織訓練の様子

